

# 動詞の項構造拡張に関する一考察\*

白 杵 岳\*\*

## A Study on Building Argument Structures

### Abstract

The aim of this paper is to provide a unified explanation for the exceptional cases for Talmy's typology in Japanese. Japanese is classified as a Verb-framed language where a Path is expressed as a verb and an argument structure of a verb is determined solely by its head verb (Usuki 2010, 2012). In this paper, I will focus on peculiar resultative constructions, motion constructions and spray-paint alternations that are licensed by the introduction of peculiar mimetics. At the first sight, these constructions might be problematic for Talmy's typology. Based on the observation of mimetics, however, I will propose a unified explanation for these constructions employing a coercion (Jackendoff 1997, Pustejovsky 1995) and also I will argue that these constructions are not problematic for Talmy's typology.

## 1. 導入

Talmy (2000) は、世界の言語は付随要素枠付け言語 (Satellite-framed languages) と動詞枠付け言語 (Verb-framed languages) の2つのタイプに分類されると提案している。本稿では、動詞枠付け言語と分類される日本語において、(1a)「結果構文」、(1b)「経路移動構文」、(1c)「壁塗り交替」のように、オノマトペを伴い例外的に認可される項構造の拡張現象に焦点を当てる。

- (1) a. ルフィはティーチをボコボコに殴った。  
(cf. \*ルフィはティーチを半殺しに殴った。)
- b. 拓哉は駅にとぼとぼ歩いた。  
(cf. \*拓哉は駅に歩いた。)
- c. 壁をポスターでべたべたに貼った。  
(cf. \*壁をポスターで貼った。)

これらの例外的に認可される構文は、Talmyの言語類型論を言語間における動詞の項拡張オプションに還元しようとする仮説にとって大きな問題となる(白杵2010, Usuki 2012)。本稿では、これらの構文の認可は強制という通常とは異なる方法で項構造の拡張が認可されると提案する (Jackendoff 1997, Pustejovsky 1995)。また、これらの項構造の拡張に関わるオノマトペの語彙的特異性も明らかにしていく (cf. Akita 2009, Hamano 1998, Kita 1997, 他)。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、Talmy (2000)の言語類型論と結果構文・経路移動構文の平行性を概観する。第3節では、それぞれの構文の特性を明らかにする。第4節では、例外的構文に対する強制による理論的な説明を試みる。第5節は結論とする。

## 2. Talmyの言語類型論と項構造拡張オプション

Talmy (2000)では、世界の言語は、事象の表現に関して動詞枠付け言語 (Verb framed languages) と付随要素枠付け言語 (Satellite framed languages) の2つのタイプに分かれると提案している。付随要素枠付け言語である英語では、(2a)の示すようにPathは付随要素 (*to school*) として事象構造に付加される。対して、動詞枠付け言語である日本語では、(2b)の示すように、Pathは動詞(行く)として動詞の項構造に付加される。

- (2) a. John walked to school.  
Manner Path
- b. 拓哉が学校に走って行った。  
Manner Path

Talmyの言語類型論は、経路移動構文と結果構文の平行性を捉えることができる(移動構文・結果構文の平行性に関しては、Goldberg 1995, Goldberg and Jackendoff 2007を参照。以下の例(3-4)は、小野(2010)より引用)。

第一に、付随要素枠付け言語である英語では、(3a-b)

\* 草稿段階より、貴重なご意見を頂いた秋田喜美氏に心よりお礼を申し上げます。なお、本稿の不備、誤りは全て筆者の責任である。

\*\* 福岡大学言語教育研究センター外国語講師

が示すように、経路移動構文・結果構文共に付随要素 (*to the station/ flat*) による動詞の項構造の拡張が認可される。対して、動詞枠付け言語である日本語では、(3c-d) が示すように、付随要素 (駅に / 平に) による項構造の拡張は認可されない。

- (3) a. John ran to the station.
- b. John pounded the dough flat.
- c. \*太郎が駅に走った。
- d. \*太郎がパン生地を平らに叩いた。

動詞枠付け言語である日本語では、(4a-b) が示すように、経路移動構文・結果構文共に複合動詞 (-着いた / -伸ばした) として Path/Result が動詞概念構造に付加される必要がある。

- (4) a. 太郎が駅に走り着いた。
- b. 太郎がパン生地を叩き伸ばした。

上記の結果構文と経路移動構文の平行性に基づき、臼杵 (2010)、Usuki (2012) は、Talmy の言語類型論を言語間におけるパラメータ的な動詞の項構造拡張オプションに還元する提案を行っている (cf. 小野2010)。つまり、それぞれの言語において、動詞の項構造の拡張を動詞自体で行うのか、それとも付随要素によって行うのかというパラメータに還元しようという提案である。

本稿では、Harley (2010)、臼杵 (2010)、Usuki (2012) の理論に問題となりうる (1) の例外的拡張現象に焦点を当てる (以下、(5) として再録)。日本語は、動詞枠付け言語である。そうすると、項構造の拡張は動詞 (複合動詞形成) によってのみ可能であると予測される。しかしながら、(5) の例では、付随要素と考えられるオノマトペ句があることで、それぞれの構文が認可されていると考えられる。

- (5) a. ルフィはティーチをボコボコに殴った。  
(cf. \*ルフィはティーチを半殺しに殴った。)
- b. 拓哉は駅にとほとほと歩いた。  
(cf. \*拓哉は駅に歩いた。)
- c. 壁をポスターでベタベタに貼った。  
(cf. \*壁をポスターで貼った。)

上記の(5a)の結果構文では、「ぼこぼこに」というオノマトペを伴うことで、通常は非文となる結果構文が認可されている。(5b)は、経路移動構文であるが、「とほとほと」と共起することによって、駅までの経路に沿った移動を含意することが可能となっている。(5c)の壁塗り交替では、「べたべたに」というオノマトペを伴うことで、構文が容認されている。次節では、例外的に認可される

それぞれの構文の特性を明らかにしていくことにする。

### 3. 例外的構文における動詞の項構造の拡張

日本語は、動詞枠付け言語と分類される。その特性として、動詞の項構造の拡張はあくまでも動詞意味概念構造に基づく (臼杵 2010, Usuki 2012)。つまり、日本語では複合動詞として、動詞の意味概念構造を拡張するというオプションしかないはずである。しかしながら、例外的に付随要素による項拡張が認可されていると思われる例が存在する。本節では、それぞれの構文の特性を明らかにしていく。

#### 3.1 結果構文

結果構文に関しては、これまでさまざまな言語において、多くの分析がなされてきた (Goldberg 1995, Goldberg and Jackendoff 2001, 影山 1996, Washio 1997, 他)。日本語の結果構文に関しては、主要部となる動詞の動詞意味概念構造に元來的に結果が含意されている場合のみに認可されると議論されている (Washio 1997, 影山 1996)。

付随要素枠付け言語である英語では、大きく2種類の結果構文が認可される。一つは、Washio (1997) が Weak Resultatives と呼ぶもので、(6a) の様に動詞が元來的に含意する結果が結果句として具現化する結果構文である。もう一つは、(6b) の様に、元來的に主要部である様態動詞が結果を含まないが、結果句の付加により項構造が拡張されるパターンである。Washio (1997) は、後者を Strong Resultatives と呼んでいる。

- (6) a. John painted the wall white.
- b. John hammered the metal flat.

この(6b)に例示される Strong Resultatives の派生が可能なのは、英語が付随要素枠付け言語であるからである。

以下の(7a-b)が示すように、動詞枠付け言語である日本語では、Weak Resultatives の派生のみが可能である。

- (7) a. 太郎は壁を白く塗った。
- b. \*? 太郎はハンマーで鉄板を平に叩いた。

また、動詞枠付け言語である日本語は、結果を表す表現として、(8)に示すように非常に生産的な複合動詞をもつ。これらの複合動詞は、二次述語を伴う英語の結果構文とは明確に区別されるべきであるが、これらの複合動詞の表す意味だけを考慮すると、英語における Strong Resultatives に相当する。

- (8) a. 太郎は目を泣きはらした。

b. 太郎はゴキブリを叩き潰した。

「泣きはらす / 叩き潰す」は、様態を表す動詞「泣く / 叩く」に結果を表す「-はらす / -つぶす」が複合することにより、全体として動詞の事象として、結果を表す動詞の概念構造をもつ。

問題となるのは、以下の(9)の例である。(9)の例では、主要部である動詞「殴る / 叩く」は様態動詞であるにも関わらず、それぞれ「ぼこぼこに / べこべこに」が付随要素として機能し、結果句として解釈される。これは、動詞枠付け言語と分類される日本語にとっては、例外的現象である。

- (9) a. ルフィはティーチをぼこぼこに殴った。  
b. 拓哉は金属板をべこべこに叩いた。

(9a)では「ルフィがティーチを殴った結果、ティーチがボコボコになった。」という解釈が可能であり、(9b)では「拓哉が金属板を叩いた結果、金属板がべこべこになった」という解釈が可能なのである。(9)の「ぼこぼこに / べこべこに」が単なる様態の強調副詞でないことは、(10)との対比から明らかである。

- (10) a. ルフィはティーチをぼこぼこに殴った。  
b. 拓哉は金属板をべこべこに叩いた。

上記の(10)では、オノマトペが「に」ではなく「と」を伴い、単なる様態の副詞として機能している。(10)の例では、「ルフィはティーチを殴った結果、ティーチがぼこぼこになった / 拓哉が金属板を叩いた結果、金属板がべこべこになった」という解釈はない。

さらに、(11a)に示すように「ぼこぼこに」の結果を否定する文を伴えないことから、「ぼこぼこに」が事象の結果を含意していることが明らかである。

- (11) a. ?\*ルフィがティーチをボコボコに殴ったが、  
ティーチは無傷だった。  
b. ルフィがティーチをボコボコと殴ったが、  
ティーチは無傷だった。

対して、「ぼこぼこ」とは、(11b)が示すように事象の結果を否定する文を伴う場合でも、文章に矛盾が生じないことから、「ぼこぼこ」は純粋な様態(もしくは、殴るという行為の効果音)であることがわかる。

また、(12a)が示すように、「ぼこぼこに」は「なる」を伴い状態変件事象を表す State として解釈される。対して、「ぼこぼこ」はあくまでも様態の副詞であるので、状態変件事象を表す State として解釈されない。

- (12) a. [[ぼこぼこになった] ティーチ]  
b. \*[[ぼこぼことなった] ティーチ]

「ぼこぼこに」が結果を含意し、「ぼこぼこ」が様態の副詞であるということは、「X時間 / X時間で」との共起が可能かどうかというアスペクトテストからも支持されると考える。(13)から明らかのように、「一時間で」と共起しないことから、主要部の動詞「殴る」自体は atelic な事象である。

- (13) ルフィはティーチを {一時間 / \*一時間で} 殴った。

「殴る」という動詞が、「ぼこぼこに / ぼこぼこ」と共起した場合、以下の(14b)が示す様に、「ぼこぼこ」では atelic な事象のままである。対して、「ぼこぼこに」と共起した場合は、判断が話者によって多少ゆれるかもしれないが、telic な事象にも解釈されうる。

- (14) a. ルフィはティーチを {?一時間 / ?一時間で} ぼこぼこに殴った。  
b. ルフィはティーチを {一時間 / \*一時間で} ぼこぼこに殴った。

この(14a-b)コントラストが示すように、少なくとも「ぼこぼこ」は単なる様態の副詞であると考えられることができる。

また、(14a)のアスペクトテストが曖昧な結果となるのは、(15a)に示す本来的結果構文と同様である。

- (15) a. 太郎は壁を {一時間 / 一時間で} 白く塗った。  
b. 太郎は壁を {?\*一時間 / 一時間で} 真っ白に塗った。

興味深いのは(15b)である。同じ本来的結果構文でも(15b)の様に、「真っ白に」という形容動詞と共起した場合は、全体解釈の意味が強くなり、telic な解釈が優勢となる。対して、(15a)では、「X時間 / X時間で」が、「壁を白く塗る」が表す事象の過程と結果のそれぞれに焦点を当てることができることから、「X時間 / X時間で」の両方とも容認されると考えられる。

以上の考察に基づくと、(9) (以下に、(16)として再録)は、「ぼこぼこに / べこべこに」は、様態の副詞ではなく、活動動詞「殴る / 叩く」と共起することで、結果を含む事象へと拡張する役目を果たしている。

- (16) a. ルフィはティーチをぼこぼこに殴った。  
b. 拓哉は金属板をべこべこに叩いた。

このように例外的に項構造を拡張できるオノマトペは、意味的制限を受けるようである。例えば、(17)のよ

うに現実世界では、想像が可能であるような意味を持つ場合においても項構造の拡張が不可能な例がある。

- (17) a. \*匠は、金属板をキラキラに叩いた。  
 b. \*ルフィはティーチを(血で)ドロドロに殴った。

(17a)では、現実世界で「匠が(加工するために)金属板を叩いた結果、金属板がキラキラになった」という想定が可能であるが、非文となる。また、同様に、(17b)では、「ルフィがティーチを殴った結果、ティーチが(血で)ドロドロになった」という想定が可能であるが、非文となる。(16-17)の対比から、オノマトペを伴う項構造の拡張のためには、オノマトペが、「ほこほこに/べこべこに」の様に動詞で表される事象により直接的に含意される結果であることが重要であることが明らかである。<sup>1</sup>

また、例外的に認可される結果構文の認可に関与するオノマトペは、(18)に示す様に、その類像的アスペクト特性を反映している(cf. Toratani 2005, Usuki and Akita 2012)。(18a)が示すように、「ほこっと」では、結果を表すことができず、(18c)の「ほこほこに」という反復型がこの構文に適合する。

- (18) a. # ルフィはティーチをほこっと殴った。  
 (CVCVQ-to)  
 b. ?? ルフィはティーチをほっこりと殴った。  
 (CVCCVri-to)  
 c. ルフィはティーチをほこほこに殴った。  
 (CVCV-CVCV-ni)

これは、(18a)の「ほこっと」が瞬間的な事象を表すのに対して、(18c)の「ほこほこに」という反復型のオノマトペはある一定の期間続く事象を表すという違いに基づくと考えられる。この「ほこほこに」のオノマトペの類像的アスペクトとも言うべき語彙的特性が、状態変化事象としての解釈を可能にしているのである。

これまでの議論で明らかになった、オノマトペを伴い例外的に認可される結果構文の成立条件を以下の(19)にまとめる。

- (19)オノマトペを伴う結果構文の成立条件とオノマトペの類像的特性：  
 a. オノマトペが、動詞によって表される事象に直接的に関わり、行為の結果として生じる状態を喚起することのできる概念を含む場合。

- b. 項構造の拡張に伴うオノマトペは、類像的アスペクトを反映し、反復型(CVCV-CVCV-ni)が基本となる。

(19a)の条件が示すように、様態動詞である「叩く/殴る」に、その結果として生じる状態(結果状態)を表す概念要素を持つオノマトペが付加されることで、状態変化動詞としての項構造に拡張されるのである。

### 3.2 経路移動構文

付随要素枠付け言語である英語では、(20a)が示すように付随要素(*to the station*)がPathを表し、動詞の項構造が拡張される。対して、動詞枠付け言語である日本語では、(20b)のように付随要素(駅に)によるPathの付加は認可されない。日本語では、(20c)の様に、複合動詞としてPathを動詞の項構造に付加することが一般的なオプションとなる。これは、Talmyの言語類型論から適切に予測される。

- (20) a. John walked to the station.  
 b. \*拓哉は駅に歩いた。  
 c. 拓哉は駅に歩いて行った。

問題となるのは、(1b)で挙げた、オノマトペを伴うパターンである(以下、(21)として再録)。(21)の例では、「とほとほと/すたすたと」が付加されることにより、「駅に」という着点へ向かう経路移動の意味が産出されている。本節では、(21)の様にオノマトペを伴う経路移動構文の派生の特性を明らかにしていく。

- (21) a. 拓哉は駅にとほとほと歩いた。  
 b. 拓哉は駅にすたすたと歩いた。

第一に、アスペクトテストでは興味深い結果となる。(22a)の「公園を歩いた」では、「公園」ある特定の範囲を表す解釈では、Telicな読みが可能である。また、(22b)のように、「駅に歩いて行った」の場合は、「駅に」が着点として解釈されるためにTelicな解釈となる。一方で、(22c)の「駅にとほとほと歩く」では、アスペクト解釈の曖昧性が観察される。

- (22) a. 拓哉は公園を{30分/?30分で}歩いた。  
 b. 拓哉は駅に{?\*30分/30分で}歩いて行った。

<sup>1</sup> 以下の(i)が示すように、裸擬態語として動詞と共起する場合は、あくまでも動詞の様態修飾としての解釈しかない。

(i) # ルフィはティーチをほこほこ殴った。

これは、裸擬態語副詞は単に「-と」(もしくは「-に」)が脱落したのではなく、動詞と共に独立した構文を形成している可能性を示している(cf. 秋田・白杵 2011)。

c. 拓哉は駅にとほとほと {?30分/?30分で} 歩いた。

第二に、(23)の否定テストでは、「公園を歩いた / 駅に歩いて行った / 駅にとほとほと歩いた」のすべてで矛盾が生じる。

(23) \*拓哉は { 駅に歩いて行った / 駅にとほとほと歩いた / 公園を歩いた } が、その場から移動していない。

これらの結果は、「歩く」という様態動詞の特性と関係していると考えられる。(24)に示すように、「歩く」は通常は動作の様態を表すが、「駅に」などと共起し事象の背景を整えば、「-に」句を TOWARD(「~に向かって」)として解釈することができる (cf. 影山 2002)。

(24) 拓哉は { 大濠公園から / 昭和通りを / 急ぎ足で } 駅に歩いた。

もちろん、文脈に依存しない解釈での「駅に歩く」は非文法的であるが、「歩く」という行為が移動を強く含意するという語彙の特性が TOWARD の解釈を強制していると考えられる。<sup>2</sup> よって、「駅にとほとほと歩いた」の「とほとほと」は、「駅に歩いた」という事象に、経路を付加する前提を想起させることで、経路移動動詞構文としての項構造へと強制しているのである。

しかし、どんなオノマトペでも Path の付加が可能というわけではない。(25)の非文が示すように、「うろうろと / ぶらぶらと」といったオノマトペは動詞の項構造に Path を付加することはできない。

- (25) a. \*拓哉は駅に { うろうろ / ぶらぶら } と歩いた。  
(cf. 拓哉は代官山を { うろうろ / ぶらぶら } と歩いた。)
- b. ?\* 拓哉は駅ににこにここと歩いた。  
(cf. 拓哉は代官山をにこにここと歩いた。)

では、「とほとほと / すすたと」と「うろうろと / ぶらぶらと」の違いは何であろうか? 「とほとほと / すすたと」と「うろうろと / ぶらぶらと」の違いは、前者は「着点に向かう直線的な経路」を創出(含意)するのに対して、後者の「うろうろと / ぶらぶらと」は「着点に向かう直線的な経路」は創出(含意)しない。これらのオノマトペの違いは、擬態語動詞 (Mimetic + suru) の形式にすると明らかになる (cf. 影山 2005)。

(26) \*(天神を / 駅に) { とほとほと / すすたと } する / (天神を) { うろうろ / ぶらぶら } する

上記の (26) が示すように、「うろうろする / ぶらぶらする」が容認される一方で、「\*とほとほとする / \*すすたとする」は非文となる。「うろうろと / ぶらぶらと」の意味は、「行為者が、とくに目的はないが、ある特定の範囲を行き来する」という意味である。つまり、「うろうろと / ぶらぶらと」には、創造的な経路の意味はなく、「特に用事や目的はないが、公園をうろつく (/ ぶらつく)」という事象を表している。よって、「駅に歩く」と共起する場合においても、経路移動構文の認可に必要な経路を付加することができないのである。

最後に、経路移動構文へと動詞の項構造を拡張させることのできるオノマトペの類像的アスペクトの観点から考察する。(27)の比較からも明らかのように、反復型のオノマトペがこの項構造の拡張に寄与している。

- (27) a. \*拓哉は駅に { とほとと / すすたと / ぶらと / うろと / にここと } 歩いた。(CVCVQ-to)
- b. ?\* 拓哉は駅に { ぶらりと / にっこりと } 歩いた。  
(CVCVri-to/CVCCVri-to)
- c. 拓哉は駅に { とほとほと / すすたと } 歩いた。  
(CVCV-CVCV-to)

これは、反復型のオノマトペが、ある一定の期間続く事象を表すという類像的アスペクト特性によるものである (cf. Toratani 2005)。

これまでの議論を踏まえ、例外的に項構造が拡張される経路移動構文の成立条件と項構造の拡張に関わるオノマトペの類像的特徴を以下にまとめる。

- (28) オノマトペを伴う例外的な経路移動構文の成立条件とオノマトペの類像的特性：
- a. 動詞によって表される事象に直接的に関わり、動詞に含意される移動の着点に向かう直線的な経路を喚起することのできる概念を含む場合。
- b. 項構造の拡張に伴うオノマトペは、類像的アスペクトを反映し、反復型 (CVCV-CVCV-to) が基本となる。

経路移動構文として成立するには、(28a)に示すように、オノマトペが表す意味が、事象に直接的に関わり、着点への直線的な経路を喚起することのできる場合に限られるのである。

<sup>2</sup> Talmy (2000) では、TOWARD も Path の一種として分類されている。直感的に、「~に向かって」という意味は、まず「着点」があることが前提となる。すでに事象内に確実な着点があることで、そこへ到達するための経路を想起することができる。よって、本稿でも、TOWARD の意味を持つ「-に」句を Path として分類することを支持する。

### 3.3 壁塗り構文

これまで、壁塗り交替に関しては、多くの先行研究がなされてきた(岸本 2006, 2011, Pinker 1989, Rappaport and Levin 1988, 他)。Pinker (1989)は、壁塗り交替が成立するには、状態変化から移動の意味へと「視点の転換」が起こる必要があると論じている。例えば、(29a)では、「赤いペンキ」が「壁」に塗るという行為によって、移動したという意味である。これに対して、(29b)では、「視点の転換」により「壁」が塗るという行為によって「赤いペンキ」という特性を持つという状態変化の解釈をもつ。

- (29) a. ジョンは、赤いペンキを壁に塗った。
  - b. ジョンは、壁を赤いペンキで塗った。
- (岸本 2011)

壁塗り構文の日本語における研究では、岸本 (2006, 2011)が示唆的である。岸本 (2011)は、Pinker (1989)の「視点の転換」は常に適用されるのではなく、2つのタイプの壁塗り交替があると提案している。第一のタイプは、(29)の「塗る」の様に、動詞が状態変化の意味と移動の意味をもともと持つ両義的なタイプである。第二のタイプは、「視点の転換」という語彙的規則によって派生されるものである (cf. Pinker 1989)。

岸本 (2011)は、「視点の転換」により壁塗り交替が成立する構文として、2つの構文を提示している。その一つが、(30)に例示する複合動詞である(以下、(30-31)の例は、岸本2011より引用)。

- (30) a. 孝は、床にカーペットを敷き詰めた。
  - b. 孝は、カーペットで床を敷き詰めた。
- (cf. \*孝は、カーペットで床を敷いた。)

岸本 (2011)によると、「カーペットで床を敷いた」が容認されないことから、「敷く」自体には壁塗り交替が認可される元来的な意味はない。しかし、「詰める」という動詞と複合することにより、「充満」の意味が付加される。これにより、状態変化の意味を記述することが可能になっているとしていると分析している。<sup>3</sup>

「視点の転換」により壁塗り交替が可能となると議論しているもう一つのタイプは、(31)に示す動詞由来名詞の関与する構文である。岸本 (2011)によると、(31b)の壁塗り交替が可能なのは、「山」が複合することで、「盛る」という行為の結果生じる形状 (configuration) の解釈を供給し、状態変化の動詞の項構造が「視点の転換」によって供給されると提案している。

- (31) a. ご飯をお茶碗に山盛りにする。
- (cf. ご飯をお茶碗に盛る。)
- b. お茶碗をご飯で山盛りにする。
- (cf. \*お茶碗をご飯で盛る。)

岸本 (2006, 2011)の壁塗り交替の分析と Talmy の言語類型論の議論を踏まえると、興味深い事実が浮き彫りとなる。動詞枠付け言語である日本語では、動詞の概念構造に基づき事象構造が派生される。そうすると、少なくとも岸本 (2011)における動詞の意味の両義性(「塗る」)に基づく交替現象と複合動詞派生(「敷き詰める」)による壁塗り交替の認可は、日本語が動詞枠付け言語であることから予測される。

しかしながら、問題となりうるのが上記 (31)に例示した「山盛りにする」のタイプと (1c)のオノマトペを伴うパターンである(壁塗り交替を可能にするオノマトペの先行研究に関しては、大崎 2007を参照)(以下、(32)として再録)<sup>4</sup>

- (32) a. ポスターを壁にべたべたに貼った。
- b. 壁をポスターでべたべたに貼った。

岸本 (2006, 2011)が議論しているように、(31)の例では、「山盛りにする」の「山」という修飾要素が「盛る」という行為の結果生じる形状 (configuration) を供給することで、壁塗り交替に必要な意味的変数の一つを満たしている。これにより、「視点の転換」が可能になっているのである。これと同様のことが、(32)のオノマトペを伴った「べとべとに貼る」でも起こっていると考えられる。

この「べたべたに」というオノマトペを伴うことによって可能となる壁塗り交替は、岸本 (2011)では議論されていない第3のタイプの「視点の転換」を伴う交替であ

<sup>3</sup> 岸本 (2011)は、この「視点の転換」は強制 (coercion) によって可能となると提案している (Pustejovsky 1995)。本稿でも、強制 (coercion) に基づく派生を第4節で議論する。

<sup>4</sup> 「山盛りにする」を一つのイディオムのな複合動詞 (述語) と見なすことで、「敷き詰める」のような複合動詞と同様の扱いをすることも可能かもしれない。そうすると、「山盛りにする」も動詞枠付け言語である日本語での想定内の現象となる。しかしながら、「山盛りにする」を複合動詞として分析しないことは、(i)に示す形態的緊密性の有無から支持される。

- (i) a. ご飯をお茶碗に山盛りにさえた。
- b. \*床にカーペットを敷きさえ詰めた。

本稿では、(i)に示す形態的緊密性の有無などから、異なる構文として扱うのが妥当であると考えている。

る。オノマトペ「べたべたに」がこの構文交替を可能にしていることは、(33b)の非文法性から明らかである。

- (33) a. ポスターを壁に貼った。  
 b. \*壁をポスターで貼った。

つまり、元来的に移動動詞である「貼る」だけでは、壁塗り交替に必要な「視点の転換」が不可能である。しかしながら、(32b)の様に「べたべたに」というオノマトペが「充満」という意味を動詞「貼る」の意味に付加し、「貼る」という行為の結果生じる形状(configuration)を明示的に表している。このことにより、壁塗り交替が可能になっていると考えられるのである。

ここで、動詞が元来的に両義的であることで可能となる壁塗り交替と、「視点の転換」によるとされる壁塗り構文のアスペクト特性を明らかにしていきたい。

まず、(34)に示すように移動と状態変化の両義的な意味を元来的に持つ動詞の場合、アスペクトテストによると限界性は曖昧である。

- (34) a. ジョンは、赤いペンキを壁に{一時間/一時間で}塗った。  
 b. ジョンは、壁を赤いペンキで{一時間/一時間で}塗った。

これに対して、(35)から明らかのように「山盛りにする」と「べたべたに貼る」は両方とも telic な事象となる。

- (35) a. ご飯をお茶碗に{\*5分間/5分間で}山盛りにした。  
 b. お茶碗をご飯で{\*5分間/5分間で}山盛りにした。  
 c. ポスターを壁に{\*5分間/5分間で}べたべたに貼った。  
 d. 壁をポスターで{\*5分間/5分間で}べたべたに貼った。

これは、「山盛り」と「べたべたに」が共に「充満」という意味を動詞の意味に供給していることが、telicityの決定に大きく関わっていると考えられるのではないだろうか。つまり、「山盛り」と「べたべたに」は、その意味的特性により全体解釈(holistic reading)を強制していることにより、事象全体は telic としての解釈しかないと考えられるのである。

次に、どのようなオノマトペがこの壁塗り交替を可能とするのかを明らかにしていきたい。第一に、(36)が示すように、「うきうきと」の様に、「貼る」という事象と

直接的に関与しないオノマトペ副詞は、壁塗り交替を可能としない。

- (36) a. ポスターを壁に{べったりと/うきうきと}貼った。(cf. ポスターを壁に貼った。)  
 b. 壁をポスターで{べったりと/\*うきうきと}貼った。(cf. \*壁をポスターで貼った。)

第二に、様態の意味しかもたない「べたっと」が壁塗り交替を認可しない。対して、「充満」の意味を付加することができ、事象として全体解釈を可能とする場合にのみ壁塗り交替が認可される(cf. Akita 2011, Usuki and Akita 2012)。

- (37) a. ポスターを壁に{べたっと/べったりと/べたべた(に/と)}貼った。  
 (cf. ポスターを壁に貼った。)  
 b. 壁をポスターで{\*べたっと/べったりと/べたべた(に/と)}貼った。  
 (cf. \*壁をポスターで貼った。)

以下に、オノマトペを伴う例外的な壁塗り交替の成立条件をまとめる。これは、岸本(2011)の分析を踏襲する一般化である。本稿では、岸本(2011)における壁塗り交替の成立条件が動詞周辺要素のみではなく、オノマトペによる動詞の項構造の拡張にも適用できると考えている。

- (38) オノマトペを伴う例外的な壁塗り交替の成立条件とオノマトペの類像的特性：  
 a. 行為に含意される結果を形状として認識できる要素を含む場合に、「視点の転換」が可能となり、壁塗り交替が可能となる(岸本 2011)。  
 b. 全体解釈に寄与する「充満」の概念をもつ CVCCVri-to / CVCV-CVCV-to が交替を可能にする。

本節では、オノマトペ要素により動詞の項構造が拡張されるという現象を、(i) 結果構文、(ii) 経路移動構文、(iii) 壁塗り交替に関して議論し、それぞれの構文の成立条件の一般化を試みた。

本稿の議論によると、それぞれの構文において例外的に認可される場合は、共通の特徴が観察される。それは、それぞれの構文が成立するために必要な意味変数をオノマトペが補填しているということである。具体的には、それぞれの構文において項構造の拡張を可能としているオノマトペは、「結果/経路/充満」の概念を創出するという特異性を持ち、それぞれのオノマトペの類像的特性を反映している。

しかしながら、問題となるのは、動詞枠付け言語とされる日本語において、これらの付加部要素による動詞の項構造の拡張をどのように説明するかということである。<sup>5</sup>これまでの議論で明らかのように、動詞枠付け言語である日本語では、典型的に動詞要素(複合動詞)によって動詞の項構造の拡張が行われる。次節では、これらの例外的構文における動詞の項構造の拡張は、通常の動詞の項構造の拡張とは異なる強制 (coercion) というプロセスによって可能になっていると提案する (Jackendoff 1997, Pustejovsky 1995)。

#### 4. 例外的構文の認可と Talmy の言語類型論

前節では、オノマトベ要素により例外的に動詞の項構造が拡張されることにより認可される構文の特性を明らかにしてきた。(39a)の結果構文、(39b)の経路移動構文、(39c)の壁塗り交替では、それぞれのオノマトベが構文に必要な意味変数を動詞に補填することで、それぞれの構文が認可されていると議論した。

- (39) a. ルフィはティーチをボコボコに殴った。
- b. 拓哉は駅にとほとほと歩いた。
- c. 壁をポスターでべたべたに貼った。

それぞれの例外的な構文の成立条件をより簡潔に一般化すると以下の様になると考える。(40a)の示すように、オノマトベがそれぞれの構文成立に必要な意味要素を補填することにより、例外的に構文の成立を可能にしているのである。

- (40) オノマトベを伴う例外的な構文の成立条件とオノマトベの類像的特性の一般化：
  - a. それぞれの構文成立に必要な意味要素「結果 / 経路 / 充満」が、概念として補填される場合、例外的に構文が認可される。
  - b. オノマトベと、それぞれの構文成立に必要な意味要素には類像的な相関関係がある。

本節では、上記の一般化を基に、それぞれの構文での例外的な動詞の項構造の拡張が強制 (coercion) によって派生されるとする分析を提案する (Jackendoff 1997, Pustejovsky 1995)。

Jackendoff (1997) の提案する語彙概念構造の強化構

成仮説において、統語部門で派生された文の解釈の破綻を避けるために、補部と主要部の語用論的な意味 (クオリア) の共通性に基づきタイプシフトが適用されるといふ、強制と呼ばれる語彙操作が提案されている。例えば、(41)においては、動詞 *begin* は補部に事象を選択する。しかしながら、補部の *the book* は事象名詞ではないことから、このままでは解釈の破綻が起こってしまう。

- (41) John [began [the book]].
- (cf. John [began [F [the book]])

そこで、Jackendoff (1997) は、解釈の破綻を避けるために意味部門での強制 (coercion) が働き、*the book* が「本を読むこと / 本を書くこと」という事象名詞として再解釈されると提案している。

本稿では、Jackendoff の語彙概念構造の強化構成仮説に基づき、例外的な構文の認可を (42) として提案する。

- (42) 強制による例外的な構文の認可：
  - それぞれの構文成立に必要な意味要素(「結果」/「経路」/「充満」)が、概念として補填される場合、解釈の破綻を避けるために強制により項構造が拡張される。

つまり、それぞれの構文において、統語部門で形成された構文が解釈の破綻を引き起こしてしまう場合に、意味部門において、オノマトベによって補填された意味要素により強制がなされ、それぞれの構文が適切な解釈を得るのである。

オノマトベによる強制が適用される場合には、オノマトベのクオリアと動詞の意味概念構造の間に共通項が必要となる。それぞれの構文で使用されている動詞の意味概念構造を (43) に示す。

- (43) a. 「殴る」: [x ACT<hitting> ON y]
- b. 「歩く」: [x MOVE<walking>]
- c. 「貼る」: [[x ACT<putting> ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT z]]]

それぞれの動詞の意味概念構造では、様態が指定されている。本稿では、この様態の指定が共通項の役割を果たすと提案する。以下に示すのが、例外的な構文の成立

<sup>5</sup> これらの例外的な構文を基に、Talmy の言語類型論が正しくないかと議論することも可能であろう (cf. Beavers et. al. 2010, 小野 2010)。しかし、本稿では白杵 (2010), Usuki (2012) の「Talmy の言語類型論は、言語間における動詞の項構造拡張オプションのパラメータ的選択に還元される」とする仮説を支持し、これらの例外的な構文は通常の項構造拡張とは異なるプロセス(強制 (coercion))によって派生されると議論する。結果として、間接的にはあるが、Talmy の言語類型論は言語間における項構造拡張オプションのパラメータ的な選択であるとする仮説を支持することになる。これらの例外的構文の認可が強制 (coercion) によるとする根拠は、本論で議論するように、それぞれの例外的構文の認可を可能にしているオノマトベに共通する意味の特異性が挙げられる。



に寄与するオノマトペのクオリア構造である (オノマトペの詳細なクオリア構造に関しては, Usuki and Akita 2012を参照)。

- (44) a. 「ほこほこに」:  
[[x ACT<hitting> ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT z<BOKOBOKO>]]]
- b. 「とほとほと」:  
[[x MOVE<walking & TOBOTOBO>] CAUSE [x BE ON-PATH-TOWARD y]]
- c. 「べたべたに」:  
[[x ACT<putting> ON y] CAUSE [y BECOME [y BE WITH z<BETOBETO>]]]

上記の(44)に示すように、それぞれのオノマトペの意味概念では、下線部で示している様態 <hitting/walking/putting> が指定されている。この様態の指定こそが、(43)の動詞との共起による強制を可能とする共通項であると考えている。この様態の共通性に基づき、動詞の意味概念構造の解釈の破綻を避けるために意味部門における強制が適用される。

様態の指定が共通項となることは、結果構文や経路移動構文の成立に関わるオノマトペの語彙的特性からも支持される。前節で論じたように、構文成立に寄与することのできるオノマトペは、動詞の表す事象に直接的に関与するものに限られる。例えば、「\*ティーチをどろどろに殴る /?\* 駅ににこにこと歩く」の非文法性が示すように、オノマトペが事象に直接的に関与しない様態をもつ場合には、項構造の拡張が成立しない。これは、オノマトペの示す様態と動詞の意味概念構造において指定されている様態が一致しないために、強制が適用されないためだと説明できる。

それぞれの構文において、強制が適用されて派生された意味概念構造は(45)の様になる。具体的には、(45a)の結果構文では「ほこほこに」による「結果」、(45b)の経路移動構文では、「とほとほと」による「経路」、(45c)の壁塗り構文では、「べたべたに」による「充満」の意味変数が強制されることにより、それぞれの構文の解釈が認可されているのである。

- (45) a. 「ほこほこに殴る」:  
[[x ACT<hitting> ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT z<BOKOBOKO>]]]
- b. 「とほとほと歩く」:  
[[x MOVE<walking & TOBOTOBO>] CAUSE [x BE ON-PATH-TOWARD y]]
- c. 「べたべたに貼る」:  
[[x ACT<putting> ON y] CAUSE [y BECOME [y BE WITH z<BETOBETO>]]]

これらの例外的な項構造の拡張は、壁塗り構文の「山盛りにする」の例からも明らかのように、オノマトペに特化したものではない。行為の結果として生じる形状等を表す語彙ならば、これらの構文の認可に寄与しうる。しかし、動詞の項構造の拡張をそれぞれの構文成立に必要な概念の補填によって可能にする要素にはオノマトペが使用される場合が少なくない。これは、オノマトペという語彙自体の特異性によるところが大きいと考えている。

オノマトペの語彙的特異性は、これまでさまざまな枠組みで論じられてきた (Akita 2009, Hamano 1998, 影山 2005, Kita 1997, 臼杵 2010, Tada 2010, Toratani 2007, 他)。オノマトペは、音と意味を直接的に結ぶ音象徴語である (Akita 2009, Hamano 1998)。本稿での項構造の拡張に寄与するオノマトペによる構文成立に必要な概念要素の創出もオノマトペが感覚語彙であるという一つの側面を反映した現象であろう。

Kita (1997) は、通常の語彙は Analytic Dimension に蓄えられているが、擬態語・擬音語は主観的で経験の感情・感覚に基づく語彙を蓄える Affect-imagistic Dimension にあると提案している。しかしながら、本稿の提案が正しいとすると、Kita (1997)における語彙範疇の二次元仮説を仮定する必要はないと考えている。オノマトペの語彙的特異性は、オノマトペ自体が通常の語彙と異なる Lexicon に記載されているのではなく、その意味の特異性(広義での類像性)から強制により構文に意味変数を供給するという派生に還元されると考えられるからである。

最後に、本稿における強制と Talmy の言語類型論の関係を確認することにする。本稿における強制が実現しているそれぞれの構文における動詞の項構造の拡張は、一言で言うならば、「(動詞枠付け言語である日本語では、)言語的に容認されないが、概念的に可能な構文の派生」である。Talmy の言語類型論の例外となる構文においては、オノマトペの特異な意味の付加による強制が、日本語において不可能な構文派生を意味部門という派生段階で可能にしていると考えられるのである。これらの例外的な項構造の拡張を示す構文が、通常の統語部門での派生とは異なる段階で認可されるのであれば、これらの構文は Talmy の言語類型論の直接的な反例とはならないと考えられる。つまり、間接的にはあるが、Talmy の言語類型論を言語間のパラメータ的な項構造拡張オプション選択に還元する仮説を支持することになると考えられるのである (cf. Harley 2010, 臼杵 2010, Usuki 2012)。

## 5. 結語

本稿では、動詞枠付け言語と分類される日本語において例外的な構文に焦点を当てた。それぞれの例外的な構文は、オノマトペ要素が構文成立に必要な意味要素を強制により補填することで成立していると提案した。本稿は、例外的構文とその認可に関して考察した第一歩であるため、暫定的な仮説が多い。また、本稿が支持する Talmy の言語類型論の生成文法理論におけるパラメーターへの還元は、今後の研究が待たれるところである(臼杵 2010, Usuki 2012)。また、この仮説を検証するためには、Talmy の言語類型論に関する幼児の言語習得や誤用についての研究が必要となってくるであろう。本稿で仮定する強制 (coercion) の理論が、今後の統語と意味のインターフェイスを明らかにする一筋の光を当てるものとなる事を願っている。

## 参考文献

- Akita, K. 2009. *A Grammar of Sound-Symbolic Words in Japanese: Theoretical Approaches to Iconic and Lexical Properties of Mimetics*. PhD. Dissertation, Kobe University.
- Akita, K. 2011. A Constructionist Analysis of Emphatic Mimetics in Japanese. *Proceedings of the Thirty-Fifth Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society 31*, 240-251.
- Akita, K. 2012. Toward a Frame-semantic Definition of Sound-symbolic Words: A Collocational Analysis of Japanese Mimetics, *Cognitive Linguistics 23*, 1: 67-90.
- 秋田喜美・臼杵岳. 2011 「僕らが銀座をぶらぶらとしない理由：オノマトペ述語の意味特性と『と』の分布再考」 MLF 2011, 大阪大学豊中キャンパス.
- Beavers, J., Levin, B. and T. Shiao Wei. 2010. The Typology of Motion Expressions Revisited. *Journal of Linguistics 46*.
- Goldberg, E. A. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, E. A. and R. Jackendoff. 2004. The English Resultatives as a Family of Constructions. *Language 80*. 532-65.
- Hamano, S. 1998. *The Sound-Symbolic System in Japanese*. Stanford: CSLI.
- Harley, H. 2010. The Syntax and Argument Structure of Motion Constructions in English, *handout presented at MLF 2010, National Institute for Japanese Language and Linguistics, Tokyo.*
- Jackendoff, R. 1997. *The Architecture of the Language Faculty*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論－言語と意味の接点－』東京：くろしお出版.
- 影山太郎. 2002. 『ケジメのない日本語』東京：岩波書店.
- 影山太郎. 2005. 「擬態語動詞の語彙概念構造」ハンドアウト 第2回日中理論言語学研究会.
- 岸本秀樹. 2006. 「『山盛りご飯』のゲシュタルトと場所格交替」影山太郎(編)『レキシコンフォーラム』No. 2, 233-250. 東京：ひつじ書房.
- 岸本秀樹. 2011. 「壁塗り構文と視点の転換」影山太郎・沈力(編)『日中理論言語学の新展望1 統語構造』33-57. 東京：くろしお出版.
- Kita, S. 1997. Tow-dimensional Semantic Analysis of Japanese Mimetics, *Linguistics 35*, 379-415.
- 小野尚之. 2010. 「結果構文と移動構文の平行性について：Talmy タイポロジーの再検討」ハンドアウト 神田外国語大学.
- 大崎梓. 2007. 「日本語場所格交替における意味的制約の階層性」*LSJ 134*: 294-299.
- Pinker, S. 1989. *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*, MIT, Cambridge, Massachusetts.
- Pustejovsky, J. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Talmy, L. 2000. *Toward a Cognitive Semantics*. vol. 1: Concept Structuring Systems. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Toratani, K. 2005. A Cognitive Approach to Mimetic Aspect in Japanese. *Proceedings of the Thirty-First Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp. 335-346.
- Toratani, K. 2007. An RRG Analysis of Manner Adverbial Mimetics, *Language and Linguistics 8.1*: 311-342.
- Usuki, T. 2012. When Talmy's typology Meets Peculiar Mimetics in Japanese. *JELS 29*: 351-357.
- Usuki, T. and K., Akita. 2012. A Qualia Account of Mimetic Resultatives in Japanese. a poster presented at The 22<sup>nd</sup> Japanese/Korean Linguistics Conference, National Institute for Japanese Language and Linguistics.
- Washio, R. 1997. Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics 6*, 1-49.